

紙齢45000号

# 讃岐

讃岐の国・香川県。南に讃岐山地を抱え、北に讃岐平野、そして瀬戸の海と島々が展開する。全国一小さな県だが、豊かな自然と温暖な気候に恵まれ、県花・県木のオリブ、県魚・ハマチなど山海の幸があふれる。県民食ともいえるうどんは、今や全国ブランドになり、その人気は衰えない。香川の元気を、住民のパワーが引っ張る。

日本一面積の狭い県内に八百軒とも九百軒ともいわれるうどん店がひしめく香川。「さぬきうどん」は郷土食を超え、全国から人を呼び込むシンボルとなっている。

坂出市東部の田園地帯に立つ「がもうどん」。看板がなければ民家と間違えそうな小さな店構えだが、午前八時半の開店前から大勢の客が詰め掛ける。一九五九年創業の製麺所。以前は卸が中心で、店は地元の人

さぬきうどんの知名度が全国区になったのは、一九九三年に出版されたうどん店ガイド「恐るべきさぬきうどん」がきっかけ。著者の一人で「うどんブームの仕掛け人」と呼ばれる四国学院大(善通寺市文京町)の田尾和俊教授は「グルメではなくレジャー」として若者に受けたのが人気の理由」と言う。

同書がスポットを当てた店の多くは、「がもうどん」のよめる味は高度になっている。その変遷を見直し、新たな小麦

## さぬきうどん



全国から多くの人を呼び込むさぬきうどん。人気店には行列が絶えない。坂出市、「がもうどん」

## 店巡りアトラクション感覚

が来る程度だった。だが、今では店頭で一日平均千玉が出る。店内に入りきらない客が野外で食べる光景も、すっかり定着した。

「お客さんが増え始めた時は店を上げようか思ってたけど、このままがええ言う人も多ゆうて」と店主の浦生正さん(60)。「ゴム長靴でも気軽に入れそうな雰囲気、さぬきうどんらしくてええんかな」と笑う。

豊かな製麺所で食べる面白さが、遊園地のアトラクションを回る感覚でうどん巡りをするファンを生んだ」と田尾教授。

二〇〇六年には、さぬきうどんを題材にした本広克行監督(丸亀市出身)の映画「UDON」がヒットするなど、根強く続く人気。その中で、次を見据えた動きも進んでいる。

製粉メーカー・吉原食糧(坂

積み木や絵本、おもちゃが広げられた十畳ほどの空間に、かわいらしい歓声と優しい笑顔が広がる。子育て支援に取り組みNPO法人「わははネット」が高松市大工町に開設した親子の交流スペース「わはは・ひろば高松」。地域で孤立しがちな若いお母さんにとって、心休まる「井戸端」になっている。

わははネットは子育て真っ最中の母親仲間で一

## 子育て支援10年



## 「わははネット」

一九八八年に設立。今年で十周年を迎えた。交流スペースを香川県内四力所で運営するほか全国の先駆けとなった「子育てタクシー」をはじめ、当事者ならではの発想から生み出される企画が注目を集めている。

子育てタクシーは「子ども連れだと運転に集中できない」「急な残業で子どもを迎えに行けない」といった母親たちの声に応じて二〇〇四年に始まった。保育実習や救急救命法などの研修を受けた民間タクシー会社の乗務員が、乳幼児を連れた外

出や子どもの対応。二年前全国協会が立ち上がり、県外にも普及し、携帯メール子ども向けの提案する「おと地域の子育て信する「わはは」は、会員約業広告や調査などによる動費に充ててユニティビ功例として他体にもウハウウ産業界の本業に採択されニーズを感

## 母親目線 企業や行

### 小豆島・高尾さん

## オリーブ栽培



「オリーブ栽培は楽しい。もっと畑を広げ、たくさんの実を収穫したい」と夢を語る高尾さん＝香川県小豆島

瀬戸内の潮風が心地よく吹く小豆島南部の丘陵地に、人の背丈ほどでまだ幹の細いオリーブの若い木が立ち並ぶ。畑で作業に汗を流す高尾豊弘さん(30)は小豆島町池田は昨年三月からこの地で栽培を始めたばかりの「新人」。本業は島内で衣料品販売の二店舗を営む商店主だ。

町内に土地を借り、慣れない手つきで開墾した。荒れ地だった畑には、今や七百本もの木々が根を張った。「一年あまりでここまでできるのは自分で驚いています。秋の収穫がとても楽しみです。畑もまだまだ広げるつもりです」と意欲満々だ。

食文化の西洋化が進んでいた一九〇八(明治四十一年)年、食用オリーブの国内産化のため初めてオリーブの苗が小豆島に

植えられた。当時は三重、鹿児島県でも同様に植栽されたが、気候風土が適さなかった。一方、島全体は過疎と高齢化が進み、頼りの観光産業も伸びないなど苦境にある。高尾さんも本業の衣料品店へ買い物に